



<b>知的障害者の心理</b>	単位数	履修方法	配当年次
	<b>2</b>	<b>R or SR</b>	<b>3年以上</b>
科目コード	<b>EE4721</b>	担当教員	<b>大関 信隆</b>

※2019年3月までに単位修得してください（新規履修登録不可）。

※RorSR科目ですが、2016年度以降スクーリングは開講いたしません。

※2014年度までの入学者と、2015年度2・3年次編入学者・科目等履修生、2016年度4月生3年次編入学者のみが学習可能です。

### ■科目の内容

「知的障害」すなわち認知処理機能の障害は、それ単独で現れることもあれば、発達障害をはじめとする様々な疾患と併存して現れることもある、発達支援にとって基本的かつ重要な概念です。本講義では知的障害者の精神機能の理解を深めていきます。

発達支援の方略に完全な正解はありません。それが良い関わりだったのかは数年経ってみないとわからないことも多く、日々の関わりではそれこそ試行錯誤、対象の方に対する研究（理解を深める行為）の日々です。だからこそ、自分自身の力で、よりベターな関わりを見つけていく必要があります。そのための一つの視点として、心理学というものの考え方から行動を理解し、そのなかで気持ちも理解し、関わり方を模索し、また創造することにつながればと思います。

### ■到達目標・テーマ

- 1) 人間の認知機能一般について説明ができる。
- 2) 知的障害の認知機能について健常者と対比的に説明できる。
- 3) 知的障害者の認知機能の状態を適切にアセスメントし、その情報を用いて個々の状況に即した、心理学的支援法略を提案することができる。

知的障害という現象に対し、本課題では心理学的側面からのアプローチ、即ち「脳が作り出している「心」と呼ばれる精神機能のどのような側面が知的障害の行動像に影響を与えているのか」ということを考察するなかで、その支援を模索していくことを狙いとしています。

### ■教科書

梅谷忠勇著『図解 知的障害児の認知と学習——特性理解と援助』田研出版、2001年  
 (最近の教科書変更時期) 2011年4月

### ■科目評価基準

スクーリング評価or科目修了試験100%

■在宅学習15のポイント

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
1	知的障害の概念と認知・学習	知的障害の概念について理解し、知的障害者の学習特性がどのようなシステムであるのか、その概要を理解します。	まず診断基準について外れなく理解しましょう。そして、知的障害の多くの方に共通してみられる要素と個別性の強い要素の両方があることを理解しましょう。基準を知ることは対象理解の最初の手がかりになります。
2	認知機能の発達と特性① 知能検査に基づく知能の発達と特性	知能検査がどのような心理学的ツールなのかを知ります。また、それを通して知的障害を見た場合に何が見えてくるのかを学びます。	知能検査は精神機能のアセスメントにとってとても重要です。検査の中身を知ると「精神機能」という概念がよくわかるはずですが、知的障害の心理とは知的障害者の「気持ち」を感じ取る学びではなく、彼らの精神機能を通して見た、彼らの行動の理解と対応の学びです。
3	認知機能の発達と特性② 観察・実験に基づく知能の発達と特性	行動観察で得られる知見や、先行研究での知見を整理しながら、認知機能の発達特性を理解していきます。	ピアジェの認知発達論は古典ですが人の認知機能の発達をわかりやすく説明してくれます。またそれを使って意外にも多くの現実の現象を説明できます。実際の子どもさんを見たりイメージしながら学習すると内容が深まります。
4	記憶の構造と制御・認知過程① 記憶システムとリハーサルの効果	最初に記憶の古典的モデルを学習します。続いて主に短期記憶の向上に寄与するリハーサル効果について、先行研究より学びます。	記憶は人間の精神機能の基本です。単に「何度も経験すれば何となく身に付く」ものが記憶ではありません。効果的な支援活動の提供を行うために、記憶システムの基本をしっかりと理解しましょう。
5	記憶の構造と制御・認知過程② 教示訓練を用いた認知機能への援助	記憶情報の群化効果について先行研究より学びます。加えて長期記憶の保持・消失特性を学び、それらを踏まえての支援方略について学習します。	先行研究が多く紹介されています。私たちはついつい「最終的な結論」にのみ飛びつきますが、どのような背景を元に得られたものなのかを知ることは、その知見を自身のケースに適用するかどうかを考える際の判断材料になります。ぜひ先行研究をしっかりと理解してください。
6	概念作用と言語① 言語の獲得	言語の役割と言語発達の過程を学習します。加えて、健常児と知的障害児との間の、言語発達の共通点と相違点を学習します。	言語は認知能力の程度を教えてくれる大切な要素です。ここでは一般的な言語の発達過程を正しく理解してください。
7	概念作用と言語② 概念作用と言語機能	感覚知覚的理解、前概念、概念という、思考のレベルの相違をとりあげて、それらが発達経過に伴いどのような変遷をたどるのかを学習します。さらに、言語教示訓練に関する研究を振り返る中で言語的な介入可能性に関しても学習します。	学習と概念形成は切っても切れない関係で、その概念形成は言語と密接に関連しています。つまり学習と言語は非常に関連の深いものなのです。少々理解し難いいくつかの実験が紹介されていますが、知見を得るための先人の工夫を味わってみましょう。

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
8	学習の成立過程と理論① 行動理論	古典的条件付け、オペラント条件付けに関する基本的知識を学習します。加えて代理学習と知的障害との関連についても理解します。	行動理論は人間の行動を読み取る上で非常に重要な考え方です。出てくる話は犬だったりネズミだったりしますが、私たちも同じ「動物」であることを忘れてはいけません。発達障害の領域で近年聞かれるようになっている「応用行動分析」はこの領域を土台とするアプローチです。理論を自身の、もしくは他者の行動にあてはめて整理しなおしてください。
9	学習の成立過程と理論② 認知説	認知面から影響をうける行動形成の仕組みを学習します。模倣や洞察学習といったテーマを扱っていきます。	ページ数は非常に少ないですが、高次の認知機能が介在する行動形成の理論です。ぜひ他の書籍にもあたりながら、認知説について整理してください。
10	知的障害と注意機能	学習成立において人間の注意機能がどのような役割を担っているかについて学習します。	対象に意識を向ける精神機能を注意といいます。この注意は人間が環境からの刺激に適切に反応し対応するために必要不可欠な機能です。一方で、当たり前になっているからこそ普段あまり意識を向けないテーマかもしれません。「注意」と「弁別」というキーワードが出てきますので、そこに意識を向けて学習してください。
11	注意機能に注目した学習訓練	過剰学習、反復学習といった学習方略と注意機能を関連付けて学習訓練を行った先行研究を学びます。	本書籍の中でも最もわかりにくい部分がこのテーマです。「逆転移行」「非逆転移行」「次元内移行」「次元外移行」という概念が出てきます。これは注意機能の実験を行う際に用いる実験刺激に対するカテゴリー名ですが、この違いをわからないと多くの実験の本当の内容がつかみにくくなりますので注意してください。「物事を区別する」というテーマが、この実験での中核となります。私たちはなぜものの違いがわかるのか、を改めて考えてみてください。
12	言語媒介と学習過程	命名能力と弁別能力との関連性を最初に学習します。続いて知的障害児の言語媒介的思考の発達の様相について整理します。	引き続き大変理解しにくいテーマが続いています。教科書の図表に書き込みをしながら、どのような研究からどのような結果を得て、どんな知見となったのかを追って行ってください。知見だけでも学習は深まりません。

回数	テーマ	学習内容	学びのポイント
13	言語機能に注目した学習訓練	弁別という情報処理過程に対して言語教示というアプローチが、知的障害者の学習にどのような意味を持つのかを、先行研究を通して学習します。そして、それをういた関わりの可能性について議論します。	私たちはよく「繰り返し学習」という言葉を使います。また「目で見て解る刺激を」という言葉も使います。ですが、なんでも繰り返していさえすれば、視覚化して呈示さえすれば、そのうち上達するのでしょうか。ここでは知的障害にとって必ずしも得意とは言えない「言語」を通した働きかけの可能性について考えていきます。
14	知的障害と動機付け	動機付けの基本メカニズムと、それが行動に与える意味について、知的障害と健常とを比較しながら学習します。	動機付けに影響するいくつかの要素について、工夫された実験が紹介されています。この実験の解釈のなかで、私たちと対象者との関係性を考えられる興味深い考察がされています。失敗することの意味について、再度考えてみましょう。
15	社会環境と学習成立との関係性	知的障害の認知特性と環境要因との重なりが、行動形成にどのような影響を与えるかについて、外的指向性という切り口から議論します。	関わり手の立ち振る舞いについて、興味深い実験が紹介されています。自身の普段の関わりをイメージしながら、読み進めてみてください。

## ■レポート課題

1 単位め	物事を学習していくなかで、人間の言語機能はどのような役割を果たしているか、そして、そこから見えてくる「関わり方」は何か、知的障害児の学習プロセスに即して論述せよ。
2 単位め	注意と動機付けが学習に果たす役割について整理し、知的障害児がどのような困難を示すか論述せよ。あわせて、関わりの方略についても論述せよ。

## ■アドバイス

### 1 単位め アドバイス

ここでは言語機能や言語能力というものが学習に果たす役割、そして言語を扱う力に困難さを有する知的障害のお子さんにとっての、学習プロセスの特性を理解していただくことが目的です。一般的に、私たちが学習を進める過程で言語能力は非常に重要な役割を担っています。まずこの関係について考察する必要があります。その際、「学習」とは何か、言語機能とは何か、その発達は如何なるものか、ということを事前に述べた上で両者の関係を整理していくと良いでしょう。その後、知的障害のお子さんにとっての言語機能の発達を整理すると、健常発達との違い、そして直面する問題点なども見えてきます。ここまでを踏まえて、最後に関わり方の切り口の一つを述べていただくと良いでしょう。関わり方を背後に流れるプロセスと関連させながら述べてみてください。

2単位め  
アドバイス

注意や動機付けといった、直接的な情報処理以外の機能もまた、私たちの学習過程に大きく影響します。これらは認知活動を下支えしたり、認知活動を方向付けたりする働きです。注意と動機付け、この2つの側面について、それぞれが学習に果たす役割をまず整理してください。その後、知的障害児にとってそれらがどのように機能し難いのか、または通常と異なって機能するのか整理してください。それらをふまえて、関わりの方略を考えてみてください。

一見すると両課題とも「気持ち」という側面を直接には扱っていないように思われるかもしれませんが、世界を捉える方法の特徴を整理し考える中で、彼らの気持ちも見えてくるはずです。

## ■科目修了試験 評価基準

テストの基本構造は、教科書をいくつかのテーマ別ブロックに分けて、各テーマ毎に「過去の研究例」と「それをふまえての対応」に関する2つの要素を問う問題が1つ（60点配点、各要素30点）、障害やアセスメント法に関する概念を問う問題が1つ（40点配点）となっています。

過去の研究例では、例えば研究者の名前といった些末な事象の誤りについては採点対象となっておりません。一方でどのようなことが研究として行われていたのか、という部分は非常に重視しています。記述が題意と異なっていたり要素間の関連性が見られない場合、個別の要素の内容が仮に間違っていなくても点数となりません。同様に、よくある対応を羅列しただけでも点数になりません。教科書をしっかりと読んで試験に臨んでください。

## ■参考図書

- ・以下の1) 2)の本は基礎的事項を押さえる上で必要になる本です。
  - 1) 田島信元・子安増生ほか編『認知発達とその支援』（シリーズ臨床発達心理学第2巻）ミネルヴァ書房、2002年
  - 2) 熊谷公明ほか編『発達障害の基礎』日本文化科学社、1999年
- ・各種発達障害に関する書籍も参考になります。例えば3) 4)のような本があります。
  - 3) 杉山登志郎・辻井正次編『高機能広汎性発達障害 アスペルガー症候群と高機能自閉症』ブレーン出版、1999年
  - 4) 中根晃編『ADHD臨床ハンドブック』金剛出版、2001年
- ・近年は5) 6)のような「マニュアル」的な書籍も多く出版されています。これらの内容がご自身の現場で即役立つわけではありませんが、さまざまななかかわりの方略を考える際の基礎的情報としては役立ちます。
  - 5) 杉山登志郎・大河内修ほか著『教師のための高機能広汎性発達障害・教育マニュアル』少年写真新聞社、2005年
  - 6) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所 編『LD・ADHD・高機能自閉症の子どもの指導ガイド』東洋館出版社、2005年

- ・知能検査に関して書かれている7)のような書籍も、有益な情報を提供してくれる場合があります。
  - 7) 上野一彦・海津亜希子ほか編『軽度発達障害の心理アセスメント』日本文化科学社、2005年
  
- ・意外と思われるかもしれませんが、下記の8) 9)のような心理学の基礎領域に関する書籍も時に参考になります。余力があったらご一読ください。
  - 8) 大山正編『実験心理学』東京大学出版会、1984年
  - 9) 御領謙・菊地正・江草浩幸著『最新 認知心理学への招待——心の働きとしくみを探る』サイエンス社、1993年